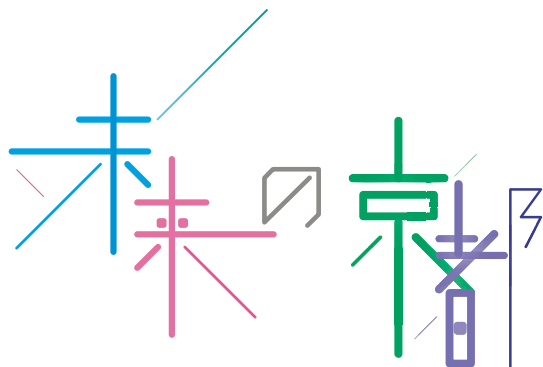


2025年 第2回 未来の京都 建築デザインコンペ 結 果 発 表



京都の未来を切り開き、元気にする建築のアイデア募集! 第2回
FUTURE KYOTO ARCHITECTURE DESIGN COMPETITION

建築デザインコンペ 2025

京 都は平安京以来、1000年以上にわたり首都として多くの人々が住み続け、文化を紡ぎ続けてきた土地であり、世界的に見ても類を見ない貴重な都市です。さらにさかのぼりますと、京都府内も含め、古墳時代の遺跡はもちろん、縄文時代の遺跡も多数確認されています。

現代からは、かけ離れた時代のことも感じられますが、現代の建築はその時代からの積み重ねの結果であり、最先端の技術、文化、芸術も、過去からの積み重ねの成果です。現在の問題に取り組み、一歩先へ進むために、私たちは、どのような積み重ねの歴史の上に、さらに何を積み重ねることができるのでしょうか。建築の分野において、何を、どのように積み重ねることが可能か、幅広いアイデアを募集します!

募集期間

2026 **2.2** 月
→ **2.27** 金 《必着》

昨年度応募作品の展示

2025 **12.6** 日 **7** 日
10:00~18:00
(最終日/17:00)

ゼスト御池 御幸町広場
京都市中京区下本能寺前町

つみかさねる

募集テーマ



提出先・問い合わせ先
一般社団法人 京都府建築士事務所協会

〒603-8163
京都市北区小山南大野町1番地 紫明会館1階
TEL 075-334-5277 FAX 075-334-5377
E-mail mirai@kyoto-kenchiku.com

主 催：
一般社団法人 京都府建築士事務所協会
共 催：
一般社団法人 日本建築士事務所協会連合会

未来の京都 建築デザインコンペ2025

大賞：たまり、熟成する

北田 祐誠

(所 属) 京都工芸繊維大学
工芸科学部
デザイン建築学過程

優秀賞：継承と拡張の

アッサンブラージュ

芝 凜太郎・菅原 慎司

(所 属) 神戸大学 大学院

優秀賞：古都から学び未来に繋げる

高橋 菜摘

(所 属) 千葉工業大学 創造工学部 建築学科



佳 作：3つの就労支援施設を核とした

久美浜町再生計画

和喜田 岬玖

(所 属) 武庫川女子大学 大学院

佳 作：向日現墳の修陵

清水 翔真

(所 属) 京都府立大学

佳 作：「昨日の廃材」と「明日の更新」

亀井 俊輔・吉田 キラリ

(グループ名) 亀井のくせにキラリ

(所 属) 千葉大学

佳 作：京町屋ビル

Tan Chee Sing

(所 属) フリーランス

奨励賞：Architecture that
Mirrors Nature

川上 航汰

奨励賞：京町屋の路地・奥庭から
再編する地域コミュニティ

太田 信幸

奨励賞：導きの炎

門脇 純也・水嶋 佑斗・

中田 遥斗・松原 生

(所 属) 摂南大学

住環境デザイン学科

川上ゼミ

奨励賞：リハーサル

坂本 紘都

(所 属) 近畿大学 大学院

奨励賞：賑わいを重ねる

岡 航

(所 属) 近畿大学 建築学部

激励賞：小さな継承

平田 和・石戸 晴・

原 一惺

(グループ名) こっちの平田

(所 属) 芝浦工業大学
建築学部 建築学科

激励賞：繰り返される引き込む「通り」

清原 元翔

(所 属) 立命館大学 理工学部
建築都市デザイン学科

激励賞：つながり

Ezgi Koyun・

Lucie Guérineau・

Luke Anderson Pink

激励賞：町内に跨る地域文化
拠点

安本 洸志朗

(所 属) 芝浦工業大学
大学院

激励賞：わたしたちは おとなりさんを
まだ知らない

辻 遥佳

(所 属) 京都美術工芸大学
建築学部 建築学科 根来研究室

激励賞：＝積重町家＝

山本 裕司

未来の京都 建築デザインコンペ2025

大賞：たまり、熟成する

北田 祐誠

(所属) 京都工芸繊維大学 工芸科学部 デザイン建築学過程



優秀賞：継承と拡張のアッサンブラージュ

芝 凜太郎・菅原 慎司

(所 属) 神戸大学 大学院

継承と拡張のアッサンブラージュ

京都・清水の街並みが創り出す京都らしさの「表情」の類似性と差異性



京都・清水周辺を歩いてどんな瞬間に京都らしさを感じるだろうか。

私は歩いていくと古くからある京都の町屋建築や街並みに合わせて建てられた新しい建築といった様々な建築の存在が京都の持つ雰囲気へと包み込んでくれた。時代と共に変化した京都らしさは何が受け継がれ、いったい何が変化していったのだろうか



■ 京都・清水周辺の街並み

多くの観光客が集まる京都・清水周辺には、京都らしさのある風景が集積している。私はこの場所を訪れると、**異国を旅しているような高揚感**に包まれる。それは、このエリアの持つ独特な世界観に施されているからである。



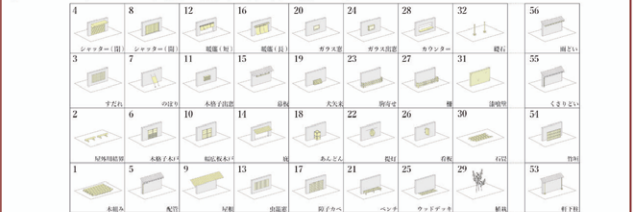
■ 京都らしさの「表情」

様々な建築において、ファサードと開口から見える室内の様子に着目した。私は、それを構成する建築部材、什器、植栽等の**組み合わせ**から京都らしさを感じとった。私はこれを「**京都の街並みの表情**」と呼び、時代と共に、表情のどの部分が受け継がれ、どこが変化していったのか検討することとした。



■ 京都らしさの「表情」を構成する要素

京都の街並みの表情を構成している要素を洗い出した。各要素の素材や色、わずかな形状の違いにも着目して、京都らしさを生み出している「**表情**」を構成する物は何か確認した。



■ アッサンブラージュから見える京都らしさを積み重ねる設計手法

アッサンブラージュを通して、京都らしさのある空間を設計する。今後は、内部空間においても京都らしさの表情を設計できるように、縦型製作から分析した京都らしさの類似性、差異性を意識しながら、空間を創る。今後の**新たな京都らしさの創出**のために可能性を示すと共に、新たな設計手法として、**多くの人を魅了し、京都らしさの溢れる空間**を創るためのツールとして活用されることを願う。



■ アッサンブラージュに見る京都らしさの類似性と差異性

アッサンブラージュとは、フランス語で「**組み立てる**」「**集合させる**」という意味を持つ。ここでは、京都の街並みの中で、異なる表情をアッサンブラージュすることで、各表情の類似性、差異性について確認し、長い歴史で今もなお受け継がれている京都らしさの「**表情**」の要素と、近年になって拡張した京都らしさとなった「**表情**」の要素を分析する。そこから、**京都らしさの根幹**といえる表情、これまでの京都らしさの「**表情**」の拡張の方向性について検討する。

ー 京都らしさの類似性ー



- ・ 石畳を使用したファサード
- ・ 廊下壁の前の緩衝空間
- ・ 軒下空間の創出
- ・ 欄や出窓によるファサードの立体感

ー 京都らしさの差異性ー



- ・ 色相の幅の拡張
- ・ 奥行きへの創出
- ・ 植栽や借景の映り込み
- ・ 犬矢来利用

優秀賞：古都から学び未来に繋げる

高橋 菜摘

(所 属) 千葉工業大学 創造工学部 建築学科

古都から学び未来に繋げる

～通過から滞在へ、時間を積層する橋～

古都の橋は、渡るだけの場所ではなく、人がとどまり、風景と関わり、時間を重ねる場であった。

しかし今日、観光客の増加により、古都の橋は人であふれ、風景を味わう余白を失いつつある。

本計画は、この状況に対し、通過の流れの中に滞在を重ねることで、橋を「時間を過ごす場所」へと更新する。



00. 敷地選定

オーバーツーリズムによる極度の混雑、周辺道路の交通規制という問題が起こっている、嵐山の観光名所である「渡月橋」周辺とする。

また、混雑緩和のため大通りと接続し、人の流れを分散する。



人で混雑している渡月橋



二手に分けられ分散させる

01. 本計画における橋とは

今日の橋は、川を渡るための手段として機能し、移動時間の短縮が優先されている。渡月橋のような著名な橋でさえ、渡ることを目的とした瞬間、その歴史や存在そのものは十分に体験されにくい。

そこで本計画では、「渡る」という行為に加え、「眺め、滞在する」という新たな用途を橋に与える。滞在を通して利用者の記憶や体験が積み重なり、橋は時間を共有する場となる。

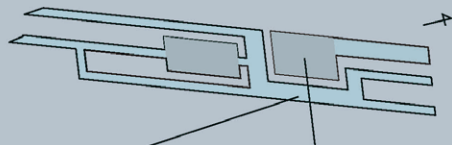
一方で、新たな滞留がオーバーツーリズムを助長してはならない。そのため明快な通過動線を確保し、滞在空間を分節して配置する。さらに動線に迂回を組み込むことで、人の流れを分散し、混雑を抑制する構成とする。



既存の橋：一本道



本計画の橋：人の分散を促す



○ 歩く、立ち止まる



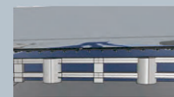
○ 立ち止まる、滞在

02. 流れ橋の利用

本計画は、渡月橋からの景観を阻害しないよう橋面を水面近くを抑える。一方で水位上昇時の構造的リスクに対しては、「流れ橋」の原理を応用し、全体の保安性を確保する。流れ橋は、増水時に橋面を流すことで主構造を守る可変的な橋である。



渡月橋と高さを超える一貫性が保たれる



水面に近づける一貫性が守られる

03. 成長する橋

流れ橋の原理を取り入れることで、橋桁には水の流れや増水の痕跡が刻まれていく。橋面は流されるたびに色合いを変え、時に新たな部材へと更新される。

その結果、橋全体には経年の差異が生まれ、場所ごとに異なる時間が表出する。本橋は、時代を積み重ねていく存在である。



増水時



平水時



増水時（橋面は流される）



増加の痕跡として、濡れた部分の木材の色が立ち現れる



04. この橋の魅力

橋面は流失を前提とした構造とすることで、訪れるたびに表情を変える橋となる。

その更新は時間の痕跡として現れ、利用者は変化を体験しながら橋の上に記憶を重ねていく。

水面に近い高さとした橋面では、川の流れや水音を身体的に感じながら滞在することができる。また、対岸の渡月橋や嵐山の風景を眺めたり滞在の場となり、その姿は水面に浮かぶように周囲の風景と新たな関係を結ぶ。

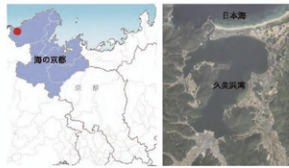
さらに橋桁より上部を木造とし、京都府産材を用いることで地域産材の利用を促進する。流失時にも環境負荷の少ない更新可能な構法とすることで、京都の木造文化の継承と現代的な循環型建築の両立を図る。

佳 作：3つの就労支援施設を核とした久美浜町再生計画 和喜田 岬玖 (所 属) 武庫川女子大学 大学院

3つの就労支援施設を核とした久美浜町再生計画

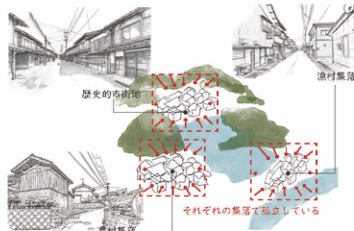
01 海の京都 京丹後市久美浜町

古代より大陸との交流の窓口として栄えた、いわば「もうひとつの京都」と呼ばれ、山陰海岸ジオパークのエリアに含まれている京丹後市久美浜町。中でも久美浜湾とそれを取り囲む広大な砂浜によって形成された、閉じながらも開かれた独特の地形を持つ京丹後市久美浜町を対象地とする。自然環境に恵まれたこの町は、牡蠣の養殖をはじめとする多様な特産品を有している点が大きな強みである。町には漁村集落、農村集落、歴史的市街地といった3つの特徴的な生活風景が形成されており、住人同士の繋がりが強い。



02 閉ざされた地域構造と後継者不足

久美浜町は山陰海岸ジオパークのミッシング区間にあたり、町の外との繋がりが少ないことから観光客を引き込めておらず、周辺性を高めることが課題となっている。また、各集落は強いコミュニティがある一方でその繋がりは集落内で完結しており、町全体としての繋がりが希薄である。さらに高齢化が進んでいることで特徴的な生活風景を生み出す後継者が不足しており、これらの久美浜らしい風景が今後失われていく恐れがあると考えた。



京都の鉄道に位置する久美浜は集落単位で完結する閉じた構造を持つ。その結果、担い手不足という「途絶の断絶」が生じている。では、その断絶を再編する装置とは何か。本計画では、それを「就労支援施設」で重ね直す。

03 就労支援施設を核として資源を循環させ、繋ぎ合わせる

そこで集落から別集落へと資源を循環させることで町を繋ぎ合わせ、集落内だけでなく町全体で支えあう地域構造を計画する。それを促す装置として就労支援施設を各集落に挿入する。就労支援施設は町と同様に社会と閉ざされた構造を持つものが多く見られる。そこで敢えて就労支援施設を核として資源を循環させることで、久美浜の生活風景を持続的に支える新たな関係性を生み出し、町と就労支援施設の相互関係を築く。また町が一体的になることで周辺性を生み出し、経済効果を高める。具体的には右図のように4つの組み立てから、町の将来像を計画した。



04 町の核となる3つの就労支援施設

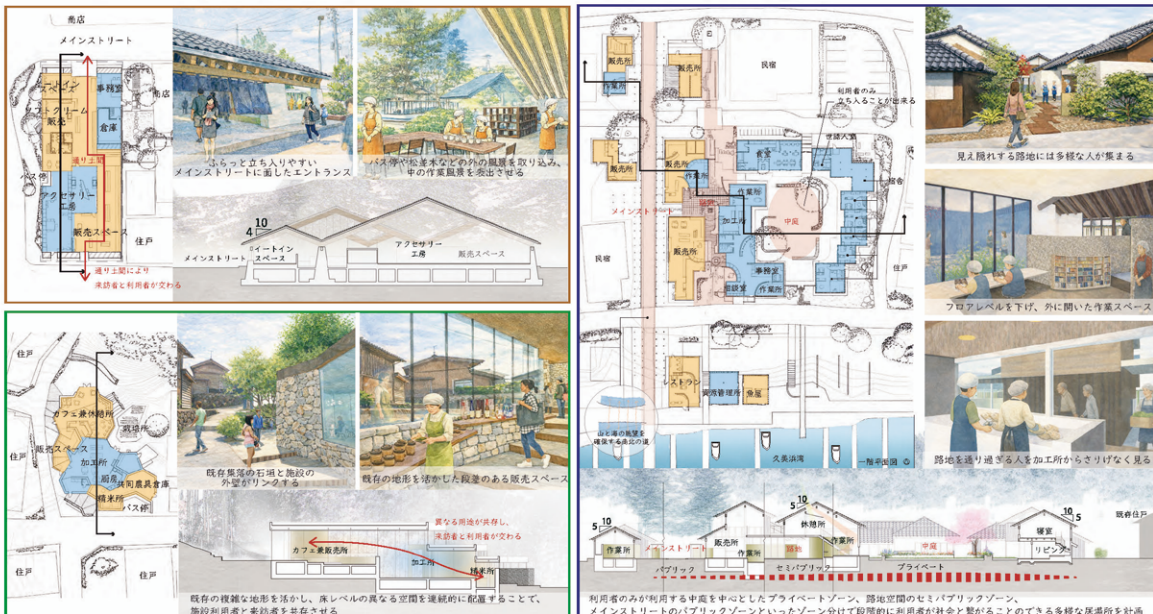
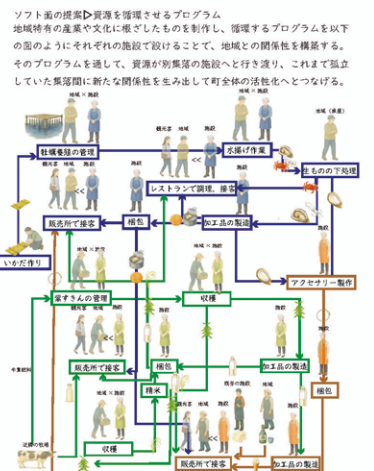
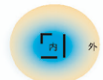
現状の就労支援施設は、社会との距離を生み出す「隔」のような存在となっており、利用者が社会の外に置かれてしまっている状況であり、これは社会復帰を目指す利用者にとって適切な環境とは言えないと考えた。そこで社会から内と外の境界をぼくき、利用者が緩やかに社会と関わりながら段階的に社会復帰を目指すことのできる就労支援施設の形態をハード面とソフト面の両面から考え、漁村集落には「海の間」、農村集落には「だんだん工場」、歴史的市街地には「振り所」という名の就労支援施設を計画した。

ハード面の提案①町の風景が作業場に溶け込む

現状の就労支援施設は、場所性を重視しない立地が多く、その土地で働いているという実感を確にない点が課題である。そこで本計画では、集落風景に溶け込み、利用者や求職者が各集落の独特な生活風景を楽しむことが出来るような風景の転換を抜き出し、建築提案に取り込んだ。

ハード面の提案②曖昧な空間の構成

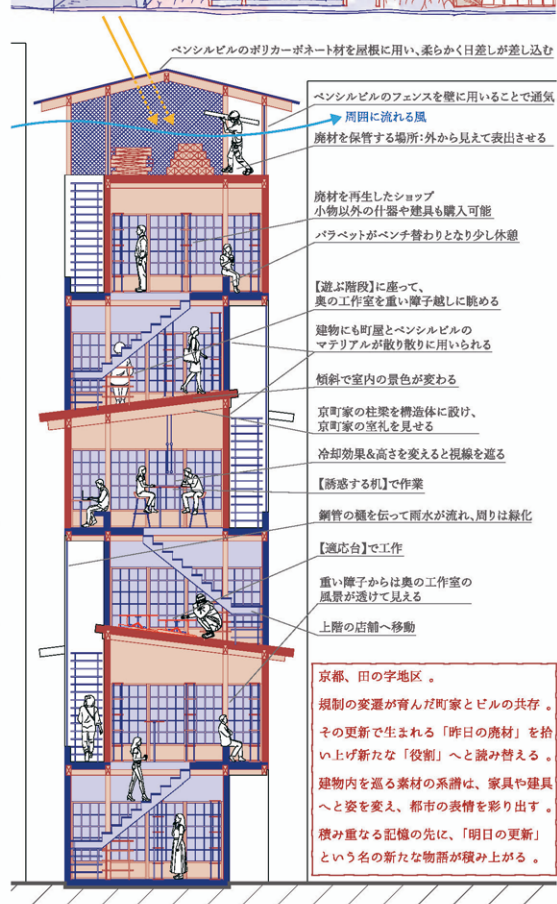
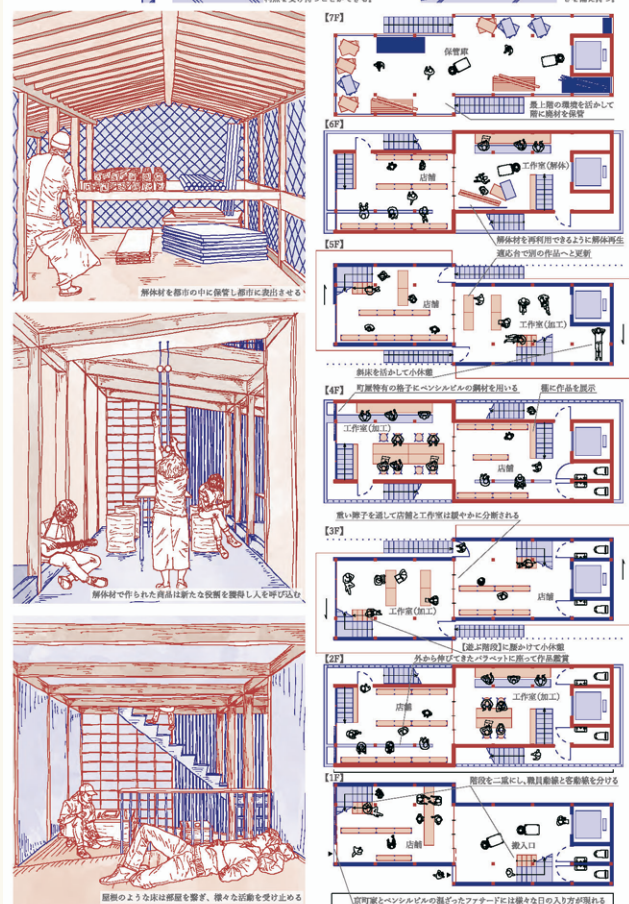
完全に開かれた施設とするのではなく、「閉じつつ開かれる」曖昧な空間構成によって外との境界をぼくき、利用者が安心して社会と繋がることのできる建築を考える。



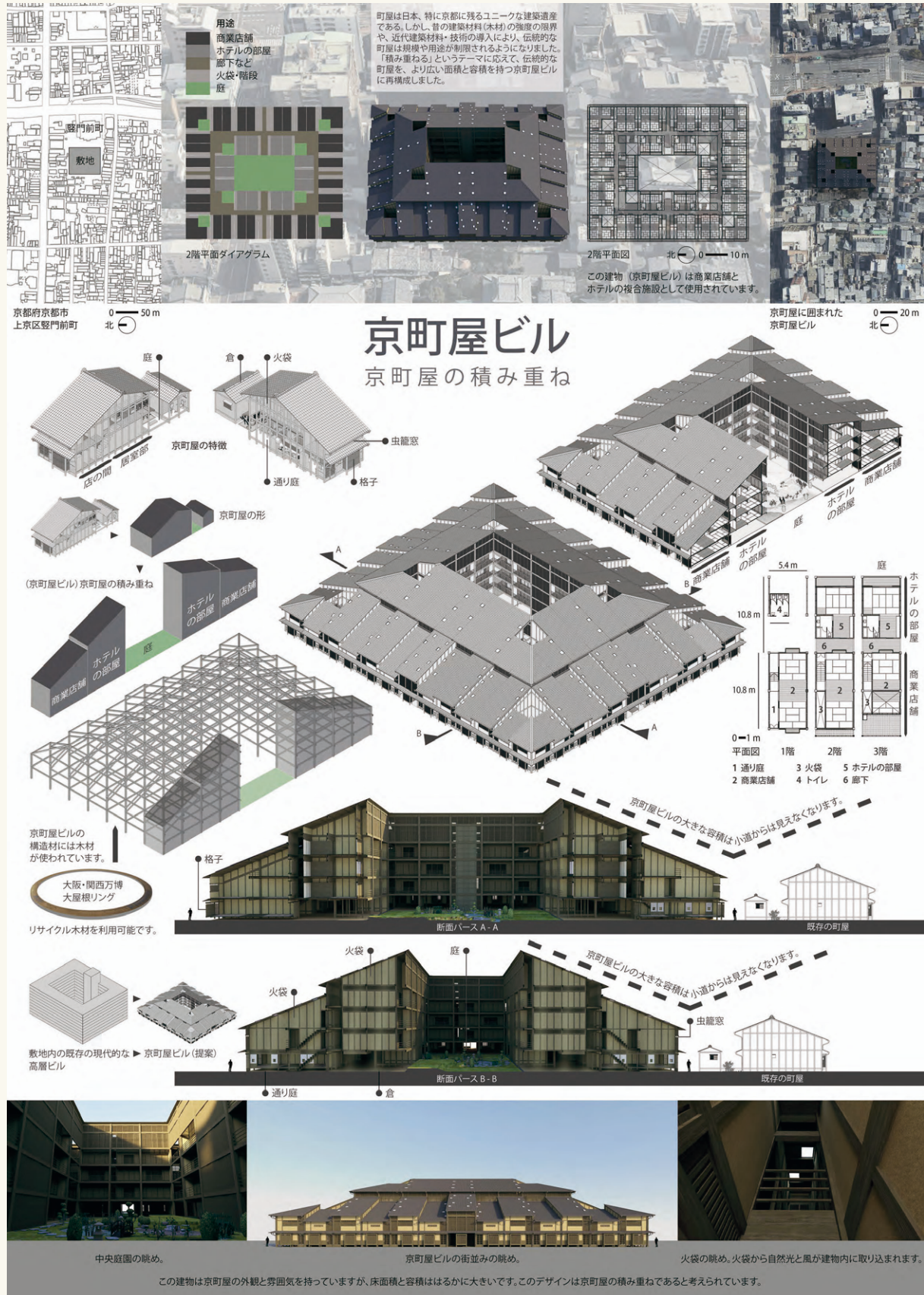
佳 作：向日現墳の修陵
清水 翔真
(所 属) 京都府立大学



(所 属)千葉大学



佳 作：京町屋ビル
Tan Chee Sing
(所 属) フリーランス



獎勵賞：Architecture that Mirrors Nature

川上 航汰



奨励賞：京町屋の路地・奥庭から再編する地域コミュニティ 太田 信幸



コンセプト

歴史の中で育まれた京町屋は、近年の自動車利用の拡大や戸建て志向の高まりにより、路地への不法駐車やフェンス設置、自転車の放置などが常態化し、かつての『第二のリビング』として機能していた路地空間の質が大きく損なわれている

本提案は京町屋の魅力になっている遺伝子や空間構成を継承しながら、地域単位で再編成を行うものである。路地や奥庭を半共有のCOMMONスペースとして再構築し、現代の暮らしに合わせた地域コミュニティを再生することで、京都固有の都市文化を未来へ接続する新しい長屋形式の京町屋を提案する



住み続けるための工夫

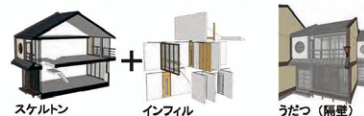
■スケルトン・インフィル

居住者はライフサイクルに合わせて自由にインフィル（内装）を変更することができ、スケルトンは管理組合で共同管理することで長期居住を実現

■うだつ（隔壁）で分離した住戸
各住戸はうだつ（隔壁）で区切られるため、各住戸のスケルトンメンテナンスの責任範囲が明確になり、適切なメンテナンスの実行が容易になる

■専用の駐車場・駐輪場

現代の生活に合わせて居住者専用の駐車場・駐輪場を設置



京町屋の構成

■プライバシーに配慮した斜め配置

玄関、奥庭での住戸間のプライバシーに配慮して、住戸を互い違いに45度斜めに配置、玄関・開口がお互いの真正面に来ないように配慮

■路地でのコミュニティ

斜め配置でできた路地の溜りを第二のリビングとしてコミュニケーションを回すことによっての良きコミュニティの復活を図る

■奥庭の共用通路

奥庭にメンテナンス用通路を設け、避難通路としても活用

■人、車分離の動線

自動車利用の拡大による車の動線を人の動線と分離、安心して路地でのコミュニケーションを可能にする

■自動車、自転車、パーソナルモビルの専用駐車場

専用の駐車場・駐輪場で路地空間での放置車両をなくす

京の遺伝子を継承

■下地窓（丸窓）
さりげなく京風を表現し、デザインポイントとなる



■ばったり床几
縁側でのお隣さんとおしゃべり等、近所付き合いを促進



■平格子
内外を適度に切りつつ、日射・通風を室内にもたらし



■うだつ
防火対策と共に、長屋における区分所有権の明確化を図る



■京行燈
路地をやさしく照らし、一体感を出すと共に、防犯にも役立つ



■一文字瓦
京都らしさの原点、町に一体感と落ち着きをもたらす



快適に住むための仕掛け（日射・通風）

■リビング上部の吹抜

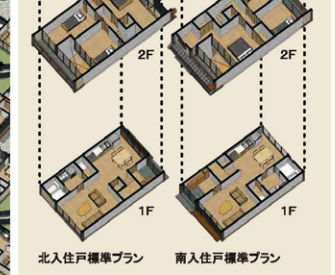
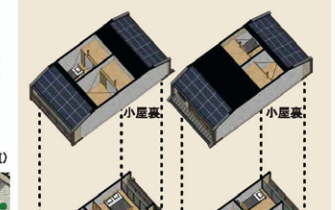
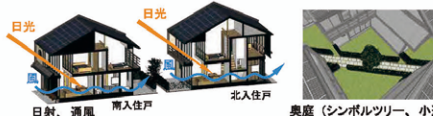
北・南入居戸とも南側のリビング上部に吹抜を設け、日射・通風を確保

■奥庭の半共有化

北入・南入居戸の接する奥庭に管理は各戸が行う生垣を二重に設け、その間に共同で管理するシンボルツリーもつ小径を通し、緊急時の避難通路、プライバシー保護の役割を持たせると共に日射、通風の獲得を促進

■路地の半共有化

路地に向かって設置した開閉式の格子戸、床几にて近所との交流促進



奨励賞：導きの炎

門脇 純也・水嶋 佑斗・中田 遥斗・松原 生

(所 属) 摂南大学 住環境デザイン学科 川上ゼミ



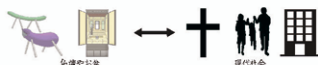
～奇～ 五山の送り火と迎え火

「五山の送り火」はお盆で迎えたお精霊様（先祖の魂）を再び冥土へ送る意味を持つ伝統行事である。毎年、お盆終わりの八月十六日に行われる。迎え火とは、送り火の反対に、お盆でお精霊様を迎えるために焚く火のことである。お盆を一緒に過ごしたお精霊様が無事に冥土へ戻れるように願いをこめて焚かれる。お盆の始まりの八月十三日に生霊先や祖先、門前で焚かれる。迎え火と送り火の火は冥土と現世を繋ぐとも言われている。



～式～ お精霊様の帰る場所

本来、お盆にお精霊様が帰る場所は仏壇である。しかし、宗教などの価値観の多様化や、家族構成などのライフスタイルの変化、都市化やマンションの台頭によるスペースの不足など、仏壇の数は減少傾向にある。その結果、お精霊様が盆に帰って来る場所（仏壇）がなく、現世の人々とお精霊様のつながりの減少、「五山の送り火」のお精霊様を再び冥土へ送るといふ本来の目的が失われつつあると考える。

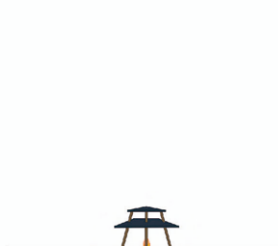


～参～ 「六道珍皇寺」と周辺



京都市東山区小松町 六道珍皇寺周辺
「六道珍皇寺」は平安時代は蘇州の入り口付近に位置していたことから、現世と冥界の境界であると信じられてきた。お盆には冥界から帰るお精霊様は必ずここを通るとされている。

～拾～ 未来の京都



参：集める
木造の建物が人々は集り、火と灰を集める

～肆～ 冥界と現世の境界

「お精霊様が帰る場所の創造」
建物が迎え火として、お精霊様が帰る場所を照らす役割を担う。ただ迎え火の役割を果たすだけでなく、現世の人々が冥土の人々への折りや思いを伝える現世と冥土をつなぐ架け橋のような存在。お精霊様と我々の交流の場、我々の折りや思いの場として残り、可視化できる存在の設計を目指す。



～伍～ 人々の折りや思い、生き様の可視化

人々は火へ折りや思いを伝え、お精霊様の生き様を火へ刻み残せる。火は燃え続けることで、「火」と「灰」を生む。つまり、我々の折りや思い、お精霊様の生き様という目に見えないものは「火」と「灰」として、人々の目に見えるようになり、それらは年月を重ねることで徐々に積み重なっていく。



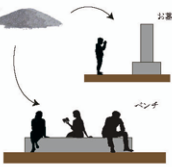
～陸～ 「灰」がもたらすもの



「灰」は木造の建物の柱や梁、天井に付着する。その木材は炭化し、防火・防虫・防腐効果、耐久性・耐火性を向上させる。その結果、この建物は数百年、数千年間、京都の街に存在し続け、人々にお精霊様とのつながりを感じさせ続ける。
「灰」はこの建物が灰が存在し続ける限り、積み重なり続ける。そのため、人々の折りや思い、お精霊様の生き様が数百年、数千年後の後世へと層として残る。

～漆～ 「灰」がもたらすもの

「灰」はコンクリートの材料として使用する。数百年、数千年かけて人々が込めた思いを結った「灰」を用いたコンクリートで様々な建物を造る。この建物はただ人々の思いが建物の形として残るだけでなく、人々とお精霊様とのつながりを感じさせる。他にも、お精霊様の遺品を燃やして生成された「灰」はコンクリートのお墓として後世に残されていく。



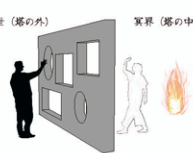
～捌～ 新たな京都の象徴

五山の送り火
「灰」を使用したコンクリートを用いて、「五山の送り火」の建物を造る。この建物は人々の思いや願いが積み重なった新たな京都の象徴としての役割と人々とお精霊様の交流の場としての役割を果たす。

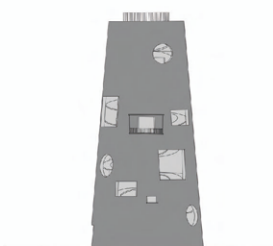


～玖～ 曖昧な境界

この建物は冥界と現世のそれぞれの世界から互いを見守り、橋が見えるように壁に穴を開ける。加えて、穴の形は人工的に造られた現世を象徴する角のある四角と現世と反対に自然界に多く存在する丸い形の穴を開け冥界を表現する。その結果、それぞれの境界は区別されつつも、曖昧になる。



式：積み重ねる
灰を用いたコンクリートで木造の建物を覆う



参：象徴
新たな象徴である塔の完成



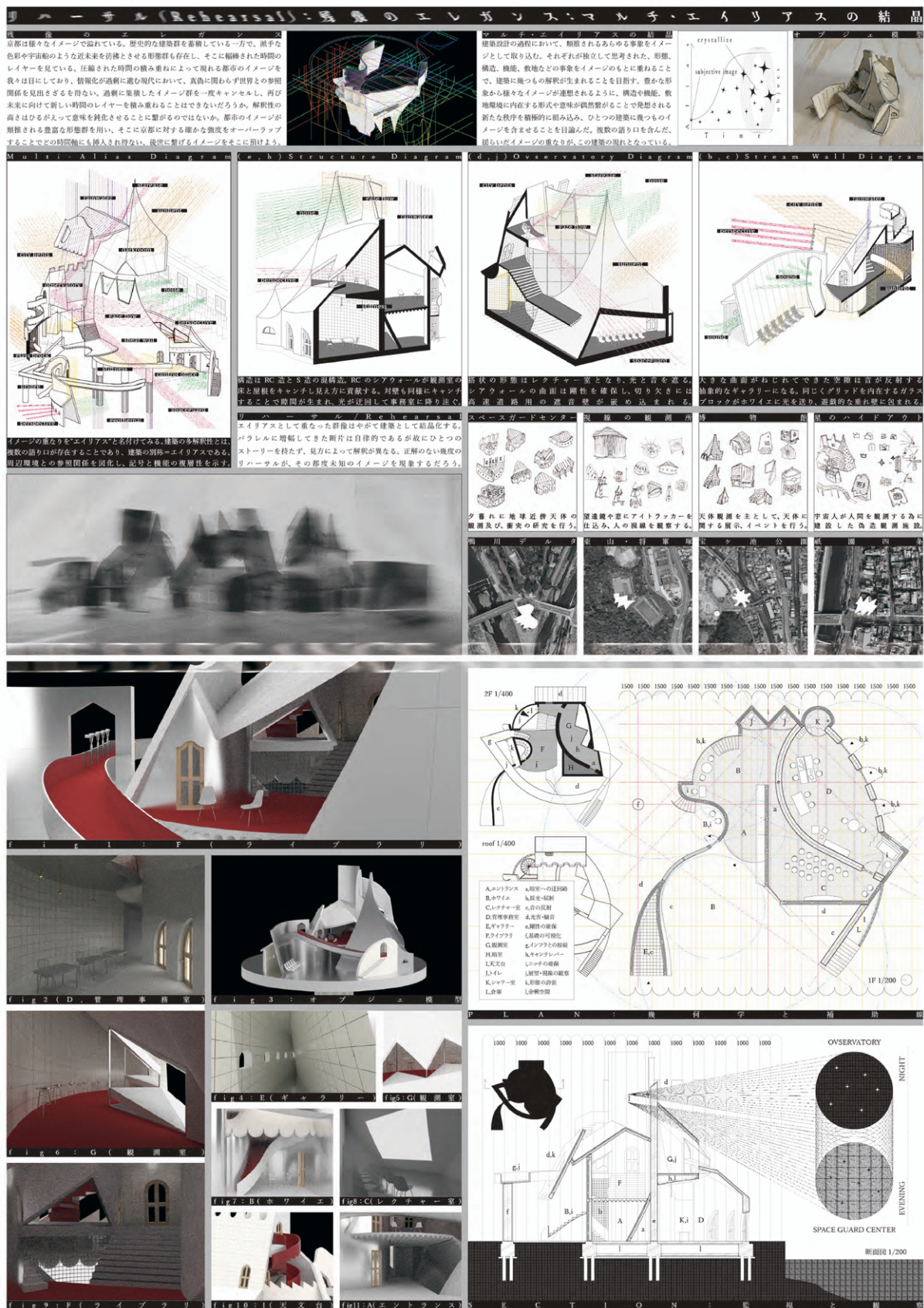
肆：拡張
京都に灰を用いたコンクリートの建物が広がる

未来の京都 建築デザインコンペ2025

奨励賞：リハーサル

坂本 紘都

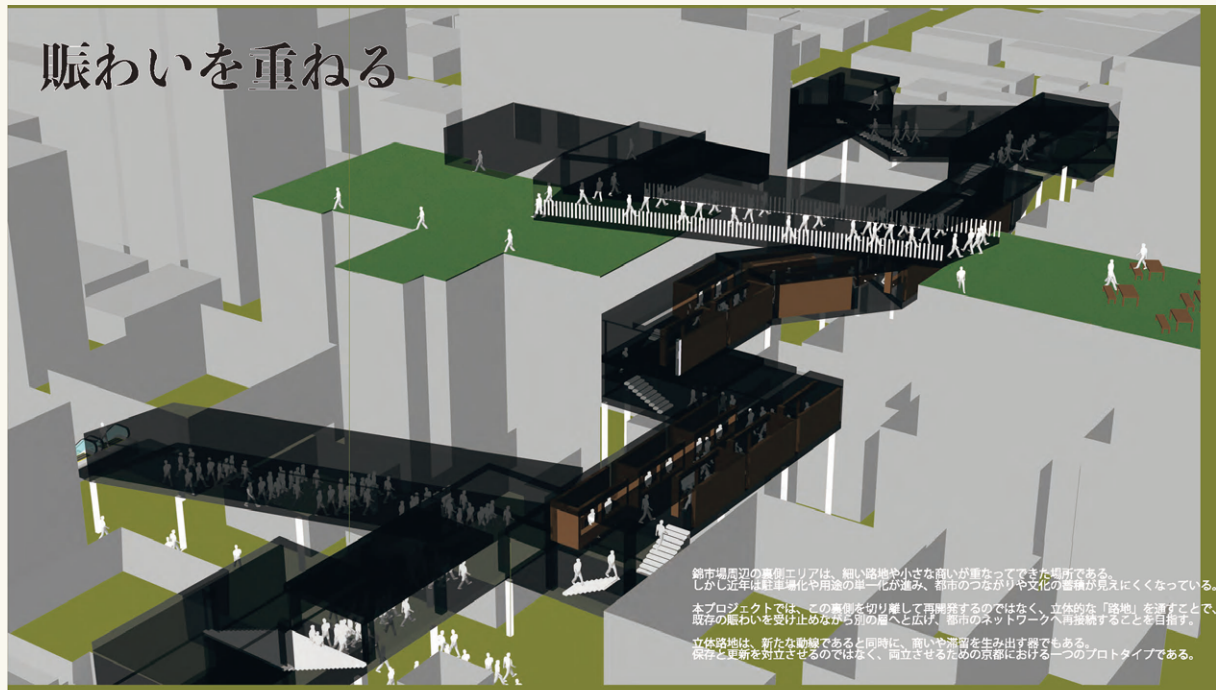
(所 属)近畿大学 大学院



奨励賞：賑わいを重ねる

岡 航

(所 属) 近畿大学 建築学部



1 商いの痕跡

錦市場周辺の裏側に位置するこれらの区域は、細街路や小規模な商いの痕跡が折り重なって形成されてきた場所である。表通りの賑わいを支える一方で、近年は駐車場化や用途の単一化によって、都市の連続性や文化の蓄積が十分に表出しない状態に置かれてきた。



2 停滞する地上商業空間

京都の現状は複数の商業アーケードに囲まれた高密度な都市環境にありながら、地上の更新が困難な構造を内包している。



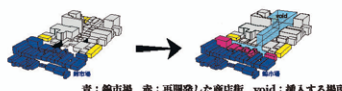
3 敷地



錦市場商店街、寺町商店街などのアーケード商店街などがひしめきあい、商業的な発展は望めないように一見思える。しかし、その上にはvoidがあり、そのvoidには発展の余地があるように思えた。

4 上空の更新

地上に新たな路地を通し、上空に立体的な動線を浮かせることで、二層の商業動線を重ね合わせる構成をとる。地上と空中に異なる性格の動線を与えることで、人の動きは水平方向に限定されることがない。立体的に広がっていく。具体的には、現在は駐車場として利用されている幅員4m未満の道路予定地を再編し、その一部に立体路地を挿入する。これにより、これまで周囲から切り離されて、十分に活用されてこなかった敷地部分を、あらためて都市動線へと組み戻していく。地上と空中の動線を分担しながら動線を重ねることで、既存の都市文脈を尊重しつつ、密集市街地における持続的な更新のあり方を提示することを目指す。



青：錦市場 赤：再開発した商店街 void：挿入する場所

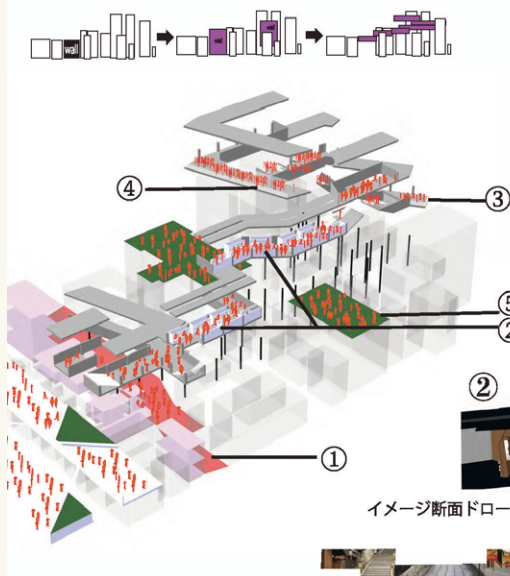
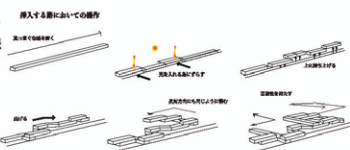
5 価値の付加

現在、錦市場周辺の賑わいは主に地上レベルに集中しており、上空には十分に活用されていない空間が残されている。本提案では、この上空に生じている空間的な空白に着目し、立体的な動線としての「道」を造るとともに、その内部に憩いや滞在といった都市の要素を挿入することで、地上に集中していた賑わいを段階的に上空へと移行させていく。これにより、従来の一層・二層を中心に展開されていた商業活動が、空中に新たな商業スペースを獲得することで三層以上の階へと広がり、建物全体としての利用価値や資産価値が向上していく可能性を持つ。賑わいの移行を通して、空間的な更新と経済的な更新を同時に成立させることを、本提案の狙いとする。



6 街の要素の再構築

この立体路地は京都の商いの痕跡を汲み上げて再構築して、作り上げていく。例えば、商店街という要素からは、食べ歩きが出来る路地という具合で、地上の商店街との共存を図りながら、商いが活性化するような空間を作る。



①にしきのうら

地上層は、御膳を扱う通商路の商店街として再開発され、空中に展開する飲食・娯楽空間と役割を分担する。この構造は、既存の錦市場商店街と繋ぎ・対立するものではなく、その機能を引き継ぎながら、地上と空中の二層構造によって賑わいの連続性を立体的に受け止めるものとする。

②あぢのみち

商業空間の賑わいは、食べ歩きや立ち寄り、娯楽の交差点といった賑わいの流れの速さによって決定している。本計画では、その中でも人の動きと強く結びついた「食べ歩き」という行為に着目し、商店街の更新として抜出した。

③あわい

食べ歩きのための「味の通り」と、風を流すための「風の通り」とを同時に確保している。歩きながら味わう行為から、次の場所へ向かう移動へと切り替わる途中で、人が立ち止まる余地をつくり出す。ここでは、手にした食べ物をゆっくり味わうことも、ただ通りかかるとして通り過ぎることも許されている。行為を固定しないことで、空中の賑わいに柔軟なリズムを考えている。

④うつろい

空中商店街の結成に向けたこの道では、壁を設けず、扉のみで構成することで、風や動線がそのまま身体に届く。商いの気配に包まれていた内部空間から、外へとじわり出るように移行することで、歩く行為そのものが、上空に身を置いていることを実感する時間へと変わっていく。

⑤ながめ

商店街の賑わいに見られるのは、消費のための場ではなく、風流と時間に身を委ねるための場所である。東山を望む景観と緑化による落ち着いた環境の中で、人は立ち寄り、これまでの賑わいを振り返りながら、ただ時間の流れを感じることが出来る。動き続けてきた身体を静かにほぐすことで、空中にいるという感覚が、より豊かなものとして身体に浸っていく。

②



イメージ断面ドローイング

⑤ 夜景



東山を眺めながら、佇むことが出来る

激励賞：小さな継承

平田 和・石戸 晴・原 一惺

(グループ名) こっちの平田

(所 属) 芝浦工業大学 建築学部 建築学科

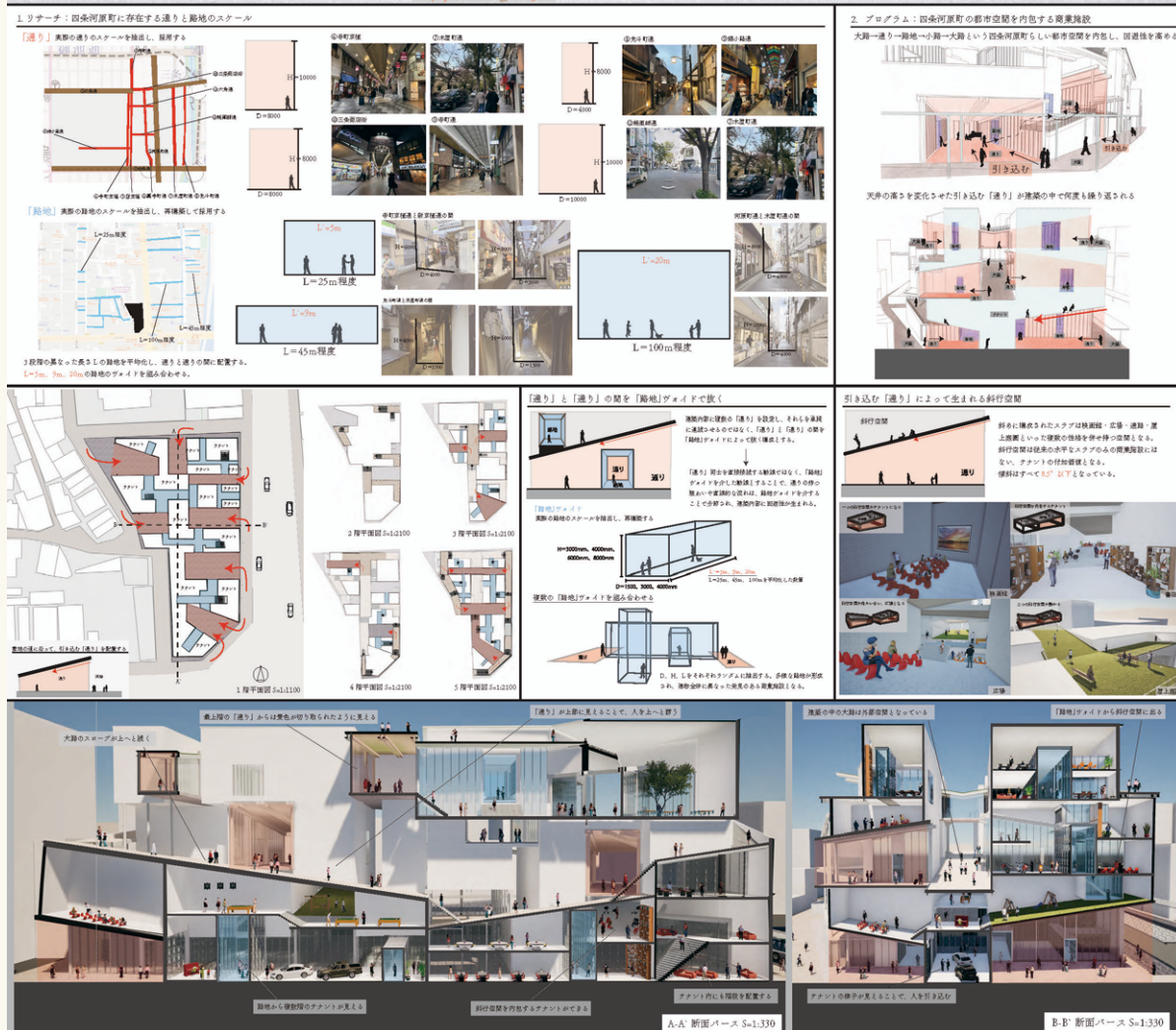
[illegible]

未来の京都 建築デザインコンペ2025

激励賞：繰り返される引き込む「通り」

清原 元翔

(所 属) 立命館大学 理工学部 建築都市デザイン学科



Ezgi Koyun · Lucie Guérineau · Luke Anderson Pink



断絶を契機として

破壊なき延長

不快を生む断面構成 — 歩行者・自転車動線の分断動線 ●



- 歩行者および自転車のモビリティ
- 既存都市組織の輪郭
- 都市レベルからの連続性を確保する張り出し
- 川沿いの歩行者・自転車軌線の連続性
- 2つのレベルを結ぶ既存階段
- 既存の川沿いの事例に倣った、河岸を結ぶ点的な装置



- ① 2つのレベルを結ぶ既存階段
- ② 川との関係において建物の輪郭を描く。
- ③ その輪郭を水面へずらす。
- ④ 歩行者用ブリッジを創出する。

連続性の提案

再利用による連続性

京都は記憶の都市であるが、町屋をはじめとする多くの木造住宅が解体されている。私たちは新たな都市を持込込たのではなく、解体現場から回収された木材を高強度の建材に持込込を提案する。

この選択は解体された建物を生み出すという観点だけに留まらず、本プロジェクトの原点そのものと合致している。

私たちは、素材の連続性によって空間の断絶を修復する。

かつて住宅の部材を構成していた梁や柱は、公共のインフラへと姿を変える。環境調へるスケールから集合体のスケールへと移行するのである。

加えて、基礎部分にもスケールによって生じた瓦葺を取り込み、過去の断片を未来の断片へと転換する。

快適性および歩行者・自転車共存に配慮した断面構成

途切れてしまった一本の線を延長すること。既存の存在を延長すること。変化し続ける記憶を延長すること。ここでの「建築」は何かを付け加えることではなく延長することを意味する。この高架歩道はただ二地点を結ぶのではない。それは、異なる時間の層を結び合わせるのである。

- 京都中心部における暮らしと文化の結節点 -

こどものころ行っていたパン屋さんの前に観光客の行列ができていた。地元の名所だった錦市場は食べ歩きする目的地になっている。日常の風景が少しずつ外に開けたものへと置き換わっていく。住民が住民としていられる居場所がなくなっていく感覚がある。これは観光客を否定したのではない。住民の正体は外からの視線に迎合することで都市としての輪郭が失われていく家都の姿である。暮らしの重なりごと、住民がけい、受け継がれてきた、暮らしと文化と都市の個性が変化している。問いたい、京都はだれのものなのかな？



02 敷地

01-3. 住民の文化的断絶

小さなコミュニティにマンシ
民構成が急変することで、日常
で浸透していく暮らしの文化が
住民同士の静かな断絶が起こっ



100

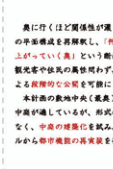
京都市下京区有楽町区にある2つの町内に跨る敷地を本計画の対象敷地とする。下京区・中京区の光学区を観光係存地、地域住民の活動拠点、住民の増加、松原地区の分布度の観点から分析を行い、町内の活動が隔りつつも、観光圧が高まっている**有楽町区**を適定し、ここに京都市を制作する**二条**と住民の地域活動を支える**倉庫所**、**地域倉庫**を設けた**土地文化拠点**と計画する。暮らしと文化、住民民士の関係性を再構築することを目指す。



03-2. 奥性の再構築

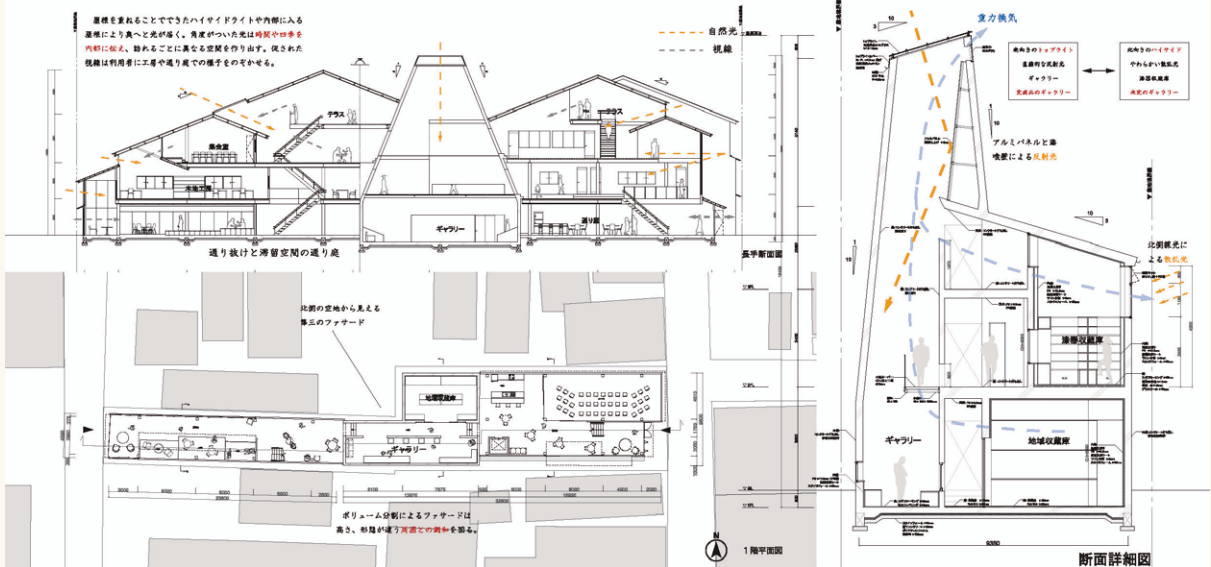
03-2. 奥性の再構築

奥に行くほど関係性が薄
の平面構成を再解釈し、「**赤
上がっていく奥**」という鮮
烈な色や仕方の異化を呼ぶ
よる複雑的な空間を想像に
本計画の敷地中央に最も
中庭が通しているが、形式
なく、中庭の連続化を試み
るから都市機能の再定義を



屋根が重なることで美

道の延長としてある通り庭の上に軒が張り出すように屋根をかける。屋根により低くなった空間は座ることを自然に従し、逗留と通り抜けの両方の空間を生む。



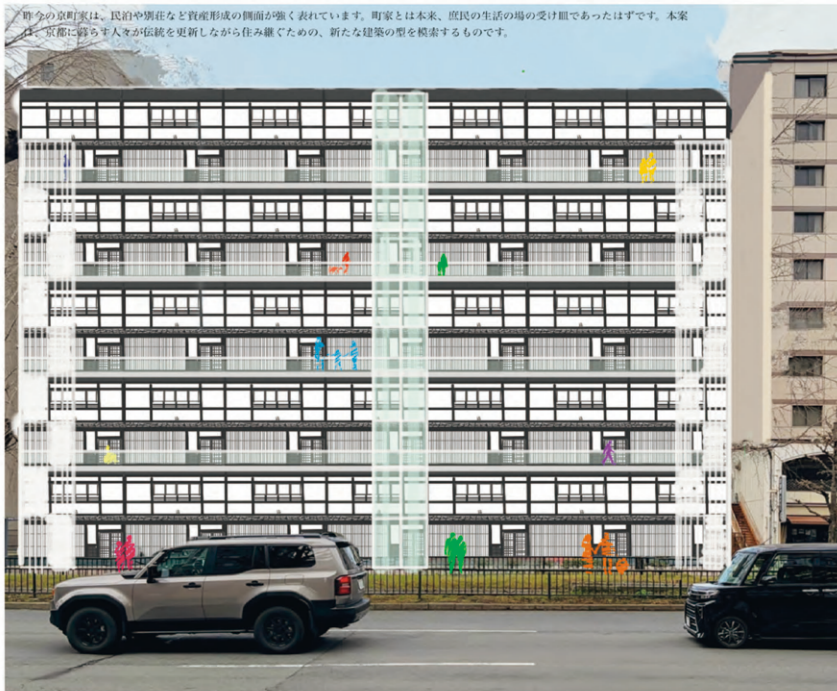
(所 属) 京都美術工芸大学 建築学部 建築学科 根来研究室



激励賞：＝積重町家＝
山本 裕司

＝積重町家＝ 100年前と100年後の生活の堆積を繋ぐ集合住宅

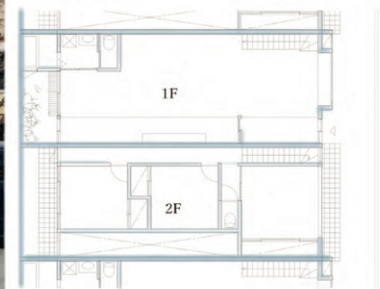
『昨今の京町家は、民泊や別荘など質産形成の側面が強く表れています。町家とは本来、庶民の生活の場の受け皿であったはずですが。本案は、京都に誇る人々が伝統を更新しながら住み継ぐための、新たな建築の型を模索するものです。』



参考にしたのは、仏パリのアパートマンです。100年前の集合住宅を更新しながら使い続けることで愛されているように、京都においても『積層』という形で新たな歴史的景観を構築します。



京町家の標準的な空間構成や生活モジュールをユニット（開口三間×奥行六間+縁側+坪庭）化し、垂直水平に積み重ねるメゾネット型住戸の計画です。伝統的な意匠を継承しながらも、機能性、断熱性、耐震性を備え、時代に合わせた更新が可能な造りとなります。玄関前の奥行2.5mの共用廊下スペースは、生活の気配が滲み出す『垂直の路地』です。打水や地蔵盆などの生活文化を許容するこの空間が、集合住宅特有の閉鎖性を解消し、地域に根差したコミュニティを形成します。



この計画は、単純な伝統の模倣ではなく、京都に根差し暮らす人々の暮らしが100年後へ向け連鎖と繋がる文化となる未来の提案です。パリのアパートマンが歴史と共存させるよう、本案も『京都の新たな伝統的街並み』になることを目指します。そして、京町家文化が市井の人々の暮らしの受け皿になる事で、人口流出の歯止めとなり、都市の循環と発展を促す仕組みを考えました。

未来の京都 建築デザインコンペ2025 講評

総 評

審査委員長 平田 晃久（株式会社平田晃久建築設計事務所 / 京都大学教授）

2年目となる未来の京都デザインコンペには、前回を上回る高いクオリティの作品が多数寄せられ、審査は大変充実したものとなった。まずはすべての応募者に感謝したい。「未来の京都」というテーマについても議論を重ね、多少荒削りであっても、これからの京都のあり方に示唆を与える提案は積極的に評価した。その一方で、完成度の高い作品に十分な評価を与えられなかった点には、心苦しさも残る。しかし、議論を喚起するフレッシュな提案が多く見られたことから、従来の「奨励賞」に加え、新たに「激励賞」を設けた。受賞者をはじめとする挑戦者たちが、その新鮮な視点を保ちながら提案の密度と質を高め、来年も挑戦してくれることを期待している。大賞については私の個別講評に譲るとして、優秀賞に輝いた芝凜太郎案は、歴史的なエレメントを現代的に組み合わせることで新たな空間を生み出す興味深い実験である。高橋菜摘案は、ランドスケープ的・作庭的観点から伝統的な場所を更新する可能性を提示しており秀逸である。都市空間の立体的展開や歴史的要素の新たな組み合わせなど、京都の持続的な変化と生命感を感じさせる作品に出会えたことは、大きな収穫であった。

大 賞 「たまり、熟成する」

審査委員長 平田 晃久（株式会社平田晃久建築設計事務所 / 京都大学教授）

二条城近くにある待賢小学校を、メディアセンターとコミュニティセンターへとリノベーションする提案である。「たまる」というキーワードに呼応した器のような形態を複層的に配置することで、学校建築のもつリジッドさを柔らかな広がりへと開くことに成功している。本案の巧みさは、言葉と形態の重層的な扱いにある。器は京都の伝統との関係を想起させるだけでなく、何かをためる形状とも重なる。「たまる」という言葉は、この街に積み重ねられてきた文化的営為の層を思わせると同時に、この新しい場所で何かが熟成していく予感をも喚起する。また、水の器というイメージも重ねられており、屋根を伝ってゆっくりとたまりながら流れ落ちた水が地面に浸透していくプロセスとも関係づけられている。さらにそれは、京都が無数の地下水脈に満たされた「水の都」であることも響き合う。こうした多層的な響き合いの場を、緻密な構想力と柔らかな感覚の統合によって作品へと昇華させた力量に、すべての審査員が魅了され、満場一致で大賞に選ばれた。

優秀賞 「継承と拡張のアッサンブラージュ」

審査委員 内田 康博（一級建築士事務所内田康博建築研究所 / 一般社団法人京都府建築士事務所協会 会長）

京都の清水寺周辺の街並みの魅力を探り、その要因を分析して意識化し再構成することで、未来に向けてより魅力的な街並みを作るための手法を提示する意欲的な提案である。歴史に根ざす京都らしさを感じさせる要素として、虫籠窓、漆喰壁、犬矢来、竹垣など伝統的な意匠や素材だけでなく、シャッター、ガラス窓、配管など現代的な要素も含めて京都らしさの「表情」に含めている点も興味深い。それらを再構成する手法としてアッサンブラージュと積み重ねをキーワードに掲げ、類似性と差異性を意識することで、現代にまでつなげる歴史に対する敬意と新たな表現を模索している。提案されたファサードは見慣れた素材や意匠が見慣れない構成で再配置されることで、意図的な違和感を感じさせつつ新たな魅力を創出している。再構成する段階での必然性がより一層煮詰められることで、より強い提案となることが期待される。説明や表現も含め非常に魅力的な提案である。

優秀賞 「古都から学び未来に繋げる」

審査委員 加藤 友規（植彌加藤造園株式会社 / 京都芸術大学大学院教授）

名勝嵐山の重要な構成要素である渡月橋は、文化財保護法上の指定基準における「橋梁」の本質を体現する稀有な存在である。本案はその本質を鋭く射抜き、既存の橋を深く鑑賞すべき対象として再定義した。対面に新たな「流れ橋」を挿入して視点場を創出した構成が鮮やかであり、単なる通行手段を、滞在と風景との対話のための空間へと見事に昇華させている。

景観を阻害せぬよう橋面を極限まで低く抑えつつ、増水時には流失を前提とする流れ橋の原理を応用した点は極めて秀逸である。水の流れの痕跡を記憶として「つみかさねる」態度は、自然の猛威をも受け入れ共生してきた京都の歴史と重なり、深い畏敬の念を感じさせる。

復旧頻度や安全管理といった実務的課題は残るが、豊かな体験を積み重ね、時間を共有する場へと風景を更新する本案は、古都の知恵を未来へ繋ぐ、品格ある解答である。